

## 図書館における人文学的資料の役割

——バトラーの論攷の意味するもの——

荷 葉 堅 正

### 序 (1)

一九六四年、アメリカで出版された“Report of the Commission on the Humanities”に Appendix B “Libraries for the Humanities”が収められて人文学に對し図書館の果たす役割が述べられている。

その序分において、図書館の果たすその役割を要約して次の如く述べている。

「図書館は、人類の記録された記憶を、他の如何なる機関よりも多く保存している。そしてまたあらゆる分野において、学者は他の学者が今までに発見したことに関する情報を得るについて図書館に依存している。

これは、研究を実験室で行なう科学者にとって、しばしば図書館の唯一の機能の如く思われがちである。しかし人文科学者はその上、図書館で生の資料を得ることが普通である。研究者の自由にできる図書館資料が、彼の研究の傾向と質共に影響を及ぼすことになる。

したがって図書館が、人文科学を援助するための如何なる総括的プログラムに於ても殊に重要な地位を占めるべきであることは明白である。<sup>①</sup>」

ここに述べられていることは、日本の図書館に於ても、その通りであり、何等疑をさしはさむ余地のないものである。

自然科学者が考える図書館の唯一の機能が、人文学者にとっては、勿論それをも含むが、その外に異質な機能が考えられなければならないし、また、図書館員が自然科学的資料に対応する場合と人文科学的資料に対応する場合とは相違してくる。information を得ることに中心を置く自然科学的図書館資料への approach の仕方とそれと異質な approach の仕方を含む人文科学的有り方の相違は図書館を機能的に把握することを考えるときには、重要な差異に当面して来るものである。またそれより派生して具体的にも多くの問題を作り出してくると考えられる。図書館の機能を科学として捉え、そこで始めて図書館学を基礎づけるような場合、自然科学的な仕方が極めて合理的という武器をもって、推し進めらるだろう。

一例をとって見ても、上述の報告書の中で、  
「科学の分野に於て新しい高度の研究を援助するために図書館資料を供給するために何を費したかわかっているの、このような機関は、人文科学の分野における研究もまたこれに相当する額でまかない得ると想像しがちである。」

と述べている。

この外資料組織を始めとするあらゆる図書館活動にも同

じ影響が見られる。

これらの事から見て人文科学資料の図書館における役割は、また重要な意味を持つものであるといえよう。

この論稿に於ては、そのことをバトラー (Pierce Butler 1886—1953) の論稿に於て眺めることが主要目的である。

バトラーは *An introduction to library science* (図書館学序論) を著し、その他理論的なものを求める種々の重要な論文を発表した学者であるが、独自の考え方が見られるし、たとえ library science の語を用いても、何か異質といえるようなものさを感じられる学者であるからである。

この論稿は、バトラーの諸論稿を参照しながら、特に “The research workers approach to books—The Humanist” を中心にするものである。これは、一九四〇年出版された “The acquisition and cataloging of books” の中で、バトラーが担当した論稿であり、バトラーの論稿に続いて、Ralph R. Shaw が *The research workers approach to books—The Scientist*, を担当している。

## 序 (2)

バトラーの理論はアメリカ図書館学界一般の主流をなすものではなく、多くの学者が彼の理論に対し、一方に於て

はその功績を讃えながら、一方には認容出来ないことを述べるのが常である。日本に於ても椎名・弥吉・大佐等の諸学者<sup>⑥</sup>によって簡単に紹介せられているが、期待と批判が交錯しているといつてよい。しかし永田正男氏の「図書館学の基礎づけのために」<sup>⑦</sup>という論文は「Piece Butcherの構想」という副題が示すように、バトラーの理論に對面された論文である。氏はバトラーの講義を聴講された人であり、その時の講義題目まで紹介されていて、筆者がバトラーの著作を学ぶに際して有効な援助をその論文より得たことを感謝しなければならない。

# 一

バトラーの学説は前述の如く、一部紹介されて来たことである。それは極めて抽象的であるとも、一種の文明批評ともいわれて来た。その通りであろうが、抽象的であるからそれが逆に善くヒントを提示するものでもある。

「図書館学序論」の序文に、

「図書とは、その民族の記録を保存するための一の社会的機械(Social mechanism)であり、図書館とは、民族の記憶を生きている個人個人の意識に伝達する社会的装置(Social apparatus)である」

といい、図書と図書館の社会的機能に注意し、文化は本質的に経験の社会的集積を意味するから、社会的機能を文化機能として把握するのである。

また前述の所引に続いて、理論設定の根拠として

「図書館員は自分の職業の理論的面に珍らしく無関心である。他の領域では何れも各自各自の職業を人間生活の主流に、何とかして適応せしめようと近代人を駆り立てるところのその求知心(curiosity)に對して、図書館員は一種独特の免疫性を持っているように思われる。図書館員は一見したところ彼等の実務の簡易さだけに立脚し、目先の技術的経過の合理化、ただそれだけで彼の知的関心を満足せしめるように思われる。」

と説くのを始めとして、種々の論文に於て同じことが見出されるが、これは図書館の機能や存在の意義を人間の文化環境の中で考察しようとする自意識であり、自分達の職能に専門的なより大きな意味を見出そうとするのである。このことはバトラーの学説の基本でもあり、出発点でもある。文化は特定の時代、特定の社会に於て標準化され、伝統化された人間の営みの一つであり、文化の知的構成要素をバトラーは scholarship といひ、特定の一文化の知的

内容の総和というが、そのことは文化機能を科学的に理解し、伝達して行くための考察でもある。

前に引用したことが諸学者にも善く引かれ、彼の学説の中心であるが、その外に分析と総合の思考に於ては総合の思考作用が多く見られ、思考形式としては、fact から process へ、process の研究から function の研究へ進むのが常である。彼の学説を代表するものは「図書館学序論」であり、その中でも序文が善く全体の動向を示している。

それ故、以下序文をそのまま記述する。

図書館は現代文明における実際の必要によって作り出された。今では、社会構造に必要な構成単位である。文化は本質的に経験の社会的集積であるから文化は個人を超越しなければならない。それによって、少くとも何れの時代の人々も先人の学んで来たところのものを全て持ち得る。図書とは、その民族の記憶を保存するための一つの社会的機械 (Social mechanism) であり、図書館とは、民族の記憶を生きている個人々々の意識に伝達する社会的装置 (social apparatus) である。

社会に関する如何なる理解も、この社会的要素の解釈と社会生活におけるその機能の解釈とを含まなければならない。かくして、図書館機能 (Librarianship) が如何なる社会科学の体系でも論議される筈の諸現象の中にその位置を占めるのである。

他の領域の社会活動における彼の同僚達と異って、図書館員は

自分の職業の理論的面に珍らしく無関心である。他の領域では、何れも各自の職業を人間生活の主流に何とかして、適応せしめようと近代人を駆り立てているところのその求知心 (curiosity) に対して、図書館員は一種独特の免疫性 (immunity) を持っているように思はれる。図書館員は一見したところ彼の実用主義 (pragmatism 実務) の簡易さにだけ立脚し、目下の技術的手順の合理化、ただそれだけで彼の知的関心を満足せしめるように思はれる。実際これらの合理化を一般化して一つの職能的哲学 (professional philosophy) になそうと如何に努力しても、彼にとつてはそれが無駄である許りでなく、却えて害になるようにさえ思われる。人類の文化的集積と個人との触れ合いの全てに含まれている主観的価値を彼は充分に知っている。だから心ない対象性を恐れ、その為に到来しつつある科学さえ恐れるように見える。純粹理性 (pure reason) の基準による限り人間は誰でも多数の同種のもの (人類) の中の、小さな一単位にすぎない。彼の一生の期間も、宇宙生成に於ける一脉搏にすぎない。個人はその種族の生命週期に限られている。変化の狭い限界の中で、人格そのものすら既成の型の繰返しにすぎない。感情は触れることの出来ない、伝えることの出来ないために、科学は感情の自意識を見返すことは出来ない。即ち希望・幸福・抱負・後悔・失望・愛着は全ての対外的な意味の空しい語である。しかし最後の分析において、これらは全ての生きている人に対して宇宙の究極的意味を含んでいる。彼にとつて宇宙そのものは彼が感ずる以外に存在しないことになる。

これ等の感情的価値に關聯して、図書館員は彼れの職務を世俗の僧職 (a secular priesthood) と考えるに到り、そして個人の魂に文化交渉 (cultural communion) の聖餐を施すと考えるに

到る。彼の活動が客観的な社会現象として調べられるようにいうあらゆる示唆にたいしても彼は、此事がすべての精神性(精神的であること=spirituality)の犠牲によつてのみ為す事が出来るということに恐れるから、驚いてたじろいてしまふ。彼は自分が怖れるに足る充分な理由を持つてゐる。論理(Logic)は冷酷であり、冷淡である。科学的研究は必ずしも広い、人間らしい、思ひやりの発展に資さない。科学者は彼れの関心が大変狭いことによつて、自分の理解しない全てについては専横になり、独断的になり、狭量になるかも知れない。彼は、他の人も同じだが、彼れ自身経験しなかつたものの存在を否定する頑くたな衝動を感じる。組織化された制度主義(systematized institutionalism)は、往々個人の感受性(personal sensibility)に對しては苛酷である。学校・養老院・教会・病院は、それぞれ精神的な特質における(in spiritual quality)或る種の代価を支払つて問題の科学的処理から引き出された何らかの助力を得た。しかも極少数の最も関心のある人々(「当事者達」)は、その利益が「失はれた」価格より勝つてゐたということに疑うように思はれ、或は個人の特殊性(personalization)と自分の形態の普遍性(generalization)との間の本質的矛盾を見るように思はれる。

それで図書館学(librianship)に於いては、次のようであるだろう。科学的知識の根本の体(organic body)は、何れにしてもこの社会機関の複雑な諸活動を説明するために樹立さるべきである。図書館員は現在、自分個人的経験という特別な条件により作り上げた特別な仮説を持つてゐるに過ぎないが、将来は自分のサービスに就いて正確な情報を持つに到るだろう。

今日の教師・社会事業家・医者様に彼もまた、忙しい実務家が自分のしている仕事について、その実際の效用と究極の価値

という模然とした問題に頭を悩している時必ず起る多くの困惑(perplexity)から恐らく自由になる筈である。

全ての図書館員が図書館学の綜合に積極的役割を果たすべきとはいわれない。さうして僅かの人々がこのような研究を遂行している間に、多くの図書館員は彼等の全力を既定の図書館体系の正常な機能と成長に捧げなければならぬ。しかし最も重要なことは、全ての図書館員が現に企てつあることについて同情ある理解を持つべきであるということである。かくしてのみに初め、出来上つた科学(図書館学)が科学的取扱ひを受け入れ易い図書館学(librianship)の全側面を考慮するという何等かの確証を得、かくしてのみ、図書館員の純人間的側面は専門職の一つとして守護されることになるだろう。

ともあれ、次の論項は一つの小論である。それは研究者に対してでなく、忙しい「図書館」実務者に対して、此の必要な図書館学を設定すべく今や進められてゐる企てに彼等の同情ある理解を得ることを望んで、書くのである。説明を完全にするために科学そのものの性質に関する第一章を含む値打があるように思われる。図書館員が一緒に集る時いつも彼等の議論の過程から、彼等はこの科学という語を広く多様な意味で使うということは、明瞭である。第一章でここにあたえられるやや長い定義は著者以外の誰も満足しないだろうが、人はその語が第二章以下の頁で使はれるその意義を確定すると望み得る。同じ理由で、統計的研究法の基礎原理について恐らく簡単な而も経験的な説明も含まれる。これもまた問題で、その中に多種の意見があり、それは意見を持つ多くの図書館員が存在するその数だけあるようである。

この散漫な第一章の後、論議は図書館学の主題から離れてさ迷うようなことはない。社会学・心理学・歴史の三つの範疇の下

で、図書館活動の領域に起る目立つた現象の予備的概観がなされる。各側面が科学的研究に依存するならば、含まれることのより精確な知識を獲得し得る必然の帰結が必ずしも表現されないけれども、必ずそこに含まれている。

ここに書かれることが、速に時代遅れとなる以上の良運は期待しない。論ぜられた多くの事柄に関して、詳細な情報は今、間合はない。それだから、代って専ら一個人の職業的経験に基く個人判断で決定することが必要だった。疑ひもなく或る物は誤って記述され、他のものは曲解した叙述である。しかしこのことを避け難くした事情を御許し願いたい。図書館学 (library science) の発展を待つて、吾々は決定的な知識を得るだらう。——今は主観的な意見を使用しなければならないが——。

## 二

自然科学は、取り扱う現象の性質、知的理解の特質、研究の手續きを明確に知っているが、人文学にあっては、これらが何れも不確かであり、現象的データ、人文学的認識の特質、依用する知的手續きの何れも明確には理解しない。こうした事情の中で、自然科学の研究方法と一致しない限り人文学は合理的にならないと主張する人があると考へ、それらの人々に対して、

「ちょうど中世の学問が、三段論法の全能を誤信して不作になったように、現代の学問も科学の方法論を過

信することによって学問の人間性を根絶しそうである。そのことはすべて科学者に罪があるのでなくて、人文学者自身が多分に非難さるべきである。人文学者が残された資源の実際の調査と厳しい自己訓練によつて、彼等自身の砦を防禦して完全であることを主張する代りに、似非科学 (pseudo-science) である弁護の必要のない論拠まで退却することを選んで来たからである」

と述べて、論を始める言葉とし、人文学資料の役割を論究する根拠としている。いささかとまどいを感じる程大胆な説示がなされているが、その意味はバトラーの他の論においてもしばしば見られ、「人々は人間の問題を科学的に回避して満足している」等々の主張は同じことを述べているのである。また「図書館学序論」第一章科学の中で、特にV<sup>⑥</sup>において、人文学は科学の対象となっていない人間の問題を含んでいると述べ、また社会に累積した経験を図書という媒介によつて、個々の成員に伝達することが図書館の根本機能であり、この伝達という機能には科学によつて把握せられない一面をもつものであり、文学・記録からその著者が何を知り、何を信じ、何を感じたかということが知られるだろうが、それに対する主観的反應は科学的に調べ

ることは出来ない」と云う。(ここでは図書館の問題としての説明であるが、それは人文学の問題として理解されても差し支えない。)

近代人は、彼にとって真実であることは、自分の *idea* と外界物との絶対的一致にある。それ故に全ての確実な知識というものが、直接観察によって得た資料から生ずると考えられ易い。しかし直接観察は科学の過程における単なる一段階に過ぎず、知識の完全な総合には、観察許りでなく其の次の段階である説明と評価を含めなければならないと述べている等も前述所引本文の意味を充足するものである。しかし図書館学序第論一章の内容を序文で閑説し、「第一章で与えられるやゝ長い定義は著者以外の誰も満足しないだろう。」<sup>⑩</sup>と述べているところから見ると、バトラ自身もこれに対して多くの反論を考えていたのである。次に人文学的現象の中に三種の知的問題を常に処理しなければならぬとして、

一、純粹科学の領域——物理的世界、生物的世界に係わる——

二、社会研究の分野——人間の相互関係に係わる——

三、人文学の領域——あらゆる人間の複合におけるこみ入った事情に係わる——<sup>⑪</sup>

が示されている。

これら三種の知的問題は一つのスペクトルの中に複合されて、一つの文化的現象を形成していて、その一々が全く別のものであるとして成立しているのではない。それらは各々図書館資料における自然科学、社会科学、人文科学の諸資料の特質を示すのであるが、図書館の全資料がそれら三資料の複合したものであるように一冊の図書に三種の見方ありうる。三種の知的種別は三種の図書へのアプローチの仕方でもある。

そして其等の中、一極端を成す自然科学(例えば化学)は各現象が純粹に客観的であり、その本質は物理的眞実性である。それに反して人文学においてはそれは純粹に主観的であり、その本質は精神的抽象である。また自然科学に於ては全ゆる経験が普遍的であり、それ故に人は同一の事物を反復して種概念が出来て、量ることも出来るが、人文学に於ては全ゆることが特殊的・個別的であり、量ることも出来ないとして、

「自然科学は実在を取り扱い、人文学は特定の時代・特定の条件における個人の現実 (*entities*) を取り扱う。それだから我々は、本質的に人文学的現象は特定の客観性と主観性とが一時的に混り合うところにおい

てのみ存在するものである。

自然科学的現象は数えることができ、重さを量ることができ、長さを測定することができる。これによって我々はそれ等を量的 (quantitative) と呼ぶ。即ちそれ等は数学的討究に従うことが出来るものである。

一方人文学的現象は部分的にこの性質を有するに過ぎない。人文学的現象に含まれている事実は量的に研究されるかも知れないが、しかし全ての人文学的現実はそのうちではない。経験が主観的であればある程、より徹底的に、それは純粹に質的なものになる<sup>⑧</sup>という。

ここで、量的なもの<sup>⑨</sup>と質的なもの<sup>⑩</sup>と示されたものは、夫々別個のものであるが相互に助け合つて成立するものである。しかし何処までいっても置き代へることの出来ないものであることを強調するのである。

それにもかかわらず質的なものとして規定した人文学の領域は、量ることのできないことからして、知識を得ることも伝達することも完全に否定される傾向が生じて来ることもあり得ることになる。

しかしそうしたことはあり得ない。

人文学的知識を、バトラーは

「特殊の客観的・主観的な錯綜から選択・抽象された一つの模型に人文学的知識はあり、そして選択も抽象も完全に孤立して行なわれるのではない。兩者とも人間性について知り且つ感ずることの全てを、一つの焦点に意識的に絞ろうとする常識的 (common-sense) 判断の作きである<sup>⑪</sup>」と述べている。

ここに人間性の常識という語が重要な概念として示されている。それは他の論稿で、worldly wisdom で述べられているものと同じ意義に使われている。即ち、

「この常識は、それだけで成り立っている超自然的なものでもなく、又、訓練と修養にのみ従うものでもない。それは量ることの出来ない主観的なものに関係したものであり、論義によつてのみ活用され、出来ると思はれる意見にのみ到達するのであるが、知識にその基礎をおき、論理、合理性によってコントロールされるものである」

という。

### 三

次に、人文学的概念の本質は主観的抽象からの理念的客



観化であるから、明白な叙述よりも象徴に依る方が容易に再現され得るということになり詩とか小説が問題になる。

図書館において、その中でも特に公共図書館に於いては、小説が他の部分の蔵書に比較して多く読まれているに拘わらず、図書館員は小説以外の所謂非小説という利用度からいうと小説より少い部分に注意を向け、これら非小説の読書を増進させることが図書館の主要な社会的義務であると考えている。そうした図書館員の一般的な態度に対して、バトラーは奇妙であるという。図書館員はインフォメーションの問題から見て、小説より非小説の方に重要性を見るが、小説からもインフォメーションを得ることもあることはともかくとして、ファクチュアル・インフォメーションを含まなくても、読者は「自己の経験を拡大し、人間の現象の意識を強化するために模索し、純粋に人文学的行動に従事している。」<sup>⑧</sup>という。

バトラーの立場は、こうした人文学的行動に注意を向け、科学的現象、ファクチュアル・インフォメーションから離れていても、それらと同程度の、場合によってはそれ以上に重要なものとみようとするのである。

彼の別の論文に、

「図書館員は年次の貸出し記録(小説と非小説との二つ

の範疇に分けられた)によって、図書館活動を測定するのを習慣にしているが、彼等は常に前者について恥じらいをもっている。図書館員は、彼等の態度に充分に気付かず、何かしらインフォメーションを求める読書が、情緒的経験を求める読書よりも高尚であると堅く信じている。」<sup>⑨</sup>と、同じことが述べられ、バトラーは資料を感情的の図書とインフォメーション的な図書とに類別し、実用面に於いては、それらは相互に相手の中に没入し合っているが、その類別を無効にするものでない。そして文化はそれら二部門に対する関心が均衡を保って正しく発展するが、その均衡が破れると前引の如きインフォメーションを求めるための読書を過信することになるとして「文化墮落の時代は、(我々自身と同じく)常に情緒の訓練と合理性の下向に相応して、過剰な主知主義を呈示するものである。」<sup>⑩</sup>という。

以上情緒的経験を求めるための読書とインフォメーションを求める読書とを類別する意味は理解されるにしても、その前者に対して図書館員は如何に対処すべきかの問題が残される。多数の読者が存するという事実にのみ依るならば、多くの読者の一々一人の資料に対する態度は無視されることになる。また読書を普及させることから良い読書を

普及させることを図書館員の一つの機能とするならばその良い読書、良い資料を確定するには如何するか。

それに答えてバトラーは「この問題について、我々が職業的正常さに立還ることの出来る唯一の方法は、真面目な人文、文学研究者の努力を観察することによって、人文、文学思想の本質を再発見することである。彼は小説の読者が本能的に、三日坊主的に、表面的にするところを、意識的に、組織的に、首尾一貫的にする。……」という。

次にバトラーは人文、文学的作業として伝記の作成を取り上げて、その作成する場合の重要な要素として次の三つを挙げている。

- (1) 主題についての事実のインフォメーションの収集
- (2) それに加えて、被伝者の人生がそこから、またその上に投影した背景の感触を、彼の人文、文学的意識の中に、含ませなければならない。

- (3) 読書が生き生きと目に見えるように描かれ、文字で綴った記録として再現しなければならない。

この中、第一の項目は科学者と同じ方法によって仕事をするのであり、重要であることはいうまでもない。しかしバトラーは第二第三の項目を第一のそれと同じく重要視して、「この二つの再構成——主題の人間の背景と彼の人格

の——における伝記作者の真実の試金石は、事実に関するインフォメーションではなくて、人間性についての常識的理解である。」<sup>⑧</sup>といい、第一の項目における事実の上に人間性が増えなければならないとする。

そしてその伝記作者を評価する基準として事実に関するインフォメーション以上に、人間性についての常識的理解に重点を置くのである。このことは文書記録が何を語ろうとも非常識なものを排除し、ありそうもない事を疑い、単なるヒントを決定的に確実なものにまで拡大させるであろうと述べている。人間性についての常識的理解の説明は必ずしも充分でない。<sup>⑨</sup>この場合に重要なのは伝記作者の作業を評価する基準として「人間性についての常識的理解」を設定することである。

また伝記作者の作業について述べられたことが伝記資料の価値の評価の基準であり、そうした資料に対応し、それら資料の収集と利用に職業的機能をもつ図書館員の価値評価の基準ともなるものである。

前に小説・非小説の解釈に於て示された人文、文学者の努力を観察することによって、人文、文学思想の本質の再評価、すなわち人文、文学の評価とここにいう人間性についての常識理解の二つが図書館員が人文、文学的資料に対応する場合の基準

であり、訓練目標と解釈してよい。

伝記について述べられたことが、他の全ての人文学的知的活動——歴史、経験の文学的再現、更に倫理学、宗教学、形而上学についてもいわれ、その人文学的研究の真髄は、単に適切な、明確な、事実に関するインフォメーションを得ることだけではない。そのインフォメーションは必要な予備的手段ではあるが。その本質はこのような真実の事実に関する構造の上に、真実であり、豊富であり、親しみ深い、生き生きとした主観的意識 (subjective awareness) を形成することである。

そのことを為す為に、人文学者は多種多様な現象に自身を曝さなければならず、その目的に一番役立つ図書は、その主題よりも、一層その問題に関連した適切性や、地域性や時代によって決定される。

これを資料の側から見て、バトラーは「人文学的研究に明瞭な性格を与えるのは、このような——親しみ易く、個人的で、些細でさえある——図書の利用である。そしてアメリカ図書館員が斯うした資料の機能上の意義を認識することを学ばない限り、アメリカ図書館組織は人文学に十分な貢献をするための設備をもたないであろう。恐らく、人文学者たちによって現実に遂行した研究の典型的な事例史

を十分に研究するほど、アメリカ図書館機能に光明と暗示を与えるものはないであろう。」という。

#### 四

それと同じことを図書館の種別に適用し、自然科学的専門図書館と人文学的それとを類比し、自然科学的専門図書館』に比して人文学専門図書館は数量的に過去に於ても、現在もアメリカに於いて少いと示すだけではなく、前者に対して、「世論は、科学者に教科的読物を提供したり、或いは素人の公衆の好奇心を満足させたりすることに、エネルギーを消費することを要求しない。」<sup>⑧</sup> が少数の人文学専門図書館に対してはそうではなくて、これら人文学専門図書館は一般公共図書館のレベルまで降りて来ることを世論は要求するものであるとそれらの相違を示している。

このことはバトラーにとって重要なことであり、彼の図書館機能に関する理論が図書館の種別（専門図書館、大学図書館、公共図書館等の）を越えて何れにも適用されるべきものを考慮していたと考えられる。それ故公共図書館に於いて最も個人的問題として提供される諸問題に多くの関心が持たれるべきであるというのであろう。

その他図書館活動としての地域研究資料の収集と協力問

題にも適用し簡単な指示があり興味あるがここでは略したい。

## 結

最後に図書館の職員のことについて、一般図書館の職員は自然科学的精神で培われている人だけで構成されるべきでないし、図書館学校の研究も、専門図書館会議にもそのことが適用されるべきであるとして、人文科学的精神が図書館の機能の基本であり、自然科学的精神と助け合いながら、発展しなければならないが、とって代わることの出来ない機能を強く主張している。しかしそれは序(1)でいう報告の内容をバトラーは自分の問題として、図書館の問題として提示しているといつてよい。

## 註

- ① この報告は人文科学財団設立の必要性を説くために作られたものであり、Appendix B(pp.31—45)は和訳され、「人文科学と図書館」の題名で「現代の図書館」Vol. 4 No. 3に収められている。
- ② 同三三頁、和訳 一二八頁。
- ③ 同三五頁、和訳 一二九頁。
- ④ Pierce Butler の著作論文名については、已に紹介済み (Information service, No. 21 pp. 38—44, 季刊図書館学 p.

12—13) であるから、詳説するとは略し、むしろ参考にした著作、論著を年代順に列挙すると次の如くである。

- (1) Pierce Butler: An introduction to library science. Chicago, University of Chicago Press, 1933.
- (2) Pierce Butler: The origin of printing in Europe. Chicago, University of Chicago Press, 1940.
- (3) Pierce Butler: The research workers approach to books—The humanist, (In the acquisition and cataloging of books.) Chicago, University of Chicago Press, 1940.
- (4) Pierce Butler: Survey of the reference field. (In the reference function of the library.) Chicago, University of Chicago press, 1943.
- (5) Pierce Butler: Librarianship as a profession, Library Quarterly, XXI, 1951, pp. 235—47.
- (6) Pierce Butler: The cultural function of the library, Library Quarterly, XXII, 1952, pp. 79—91.
- (7) Pierce Butler: The life of the book, Library Quarterly, XXII, 1953, pp. 157—63.
- (8) Pierce Butler: The bibliographical function of the library. Journal of Cataloging and Classification Vol. 9, 1953 pp. 3—11.
- (9) Louis R. Wilson: 「一九三三年出版」"An introduction to library science" 序  
Reece Ernest J.; Walter, Frank K.: 等の書評  
「応和訳をめぐって」 Information Service 誌  
「われわれの中」(2)を除く全ページ、  
「応和訳をめぐって」

- ⑥ 椎名六郎 図書館学概論 二七頁。  
弥吉光長 新稿図書の選択 一四頁。  
大佐三四五 図書館学の展開。
- ⑦ 季刊図書館学第一卷四号。
- ⑧ Humanist's Approach to Books, p. 271. (以下 HAB)
- ⑨ 本文は library science であるが、前后的意味からして推察した。
- ⑩ Introduction to Library Science, Vol. 1, The Nature of Science, v. pp. 26—30.
- ⑪ Ibid. p. IV
- ⑫ HAB, p. 272.
- ⑬ HAB pp. 273—274.
- ⑭ HAB, pp. 275—276.
- ⑮ Librarianship as a profession, p. 241.
- ⑯ HAB, p. 278.
- ⑰ Survey of the Reference field, pp. 5—6.
- ⑱ Ibid. p. 5.
- ⑲ HAB, pp. 277—278
- ⑳ HAB, p. 281.
- ㉑ 常識として別の場合に詳細に考察する。
- ㉒ HAB, p. 281.
- ㉓ HAB, p. 282.

(本学助教授、図書館学)